父なき家庭の母娘あるいはおばさん文学の（不）可能性－ 1930 年代初頭のドイツ少女文学について－

著者	佐藤 文彦
著者別表示	SATO Fumihiko
雑誌名	金沢大学歴史言語文化学系論集．言語・文学篇
号	13
ページ	1-22
発行年	2021-03-25
URL	http://doi.org/10.24517/00066968

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇
第 13 号　2021 年　1～22

父なき家庭の母娘あるいはおばさん文学の（不）可能性
—1930 年代初頭のドイツ少女文学について—

佐 藤　文 彦

0　はじめに

ワイマール共和国期のドイツ児童文学には、少年のみならず、少女を主人公にしたものもまた多い。ベルリンやハンブルク、シュトゥットガルトなどの大都市に暮らす彼女らに共通する特徴として、男勝りなまでに活発な点が挙げられよう。カウボーイの格好で仮装パーティに参加する子もいれば、普段着がジャージズボンの子もいる。3 人の兄たちと同様に育てられた子もいれば、ひとりで質屋に入り家計を助けようとする子もいる。

本論は、1930 年代初頭に発表された 5 つの少女文学に登場する 5 人の表題主人公に焦点を当て、彼女らと家族、とりわけ親子の関係について考察するものである。第一次世界大戦後に起こった近代市民家族の変容あるいは崩壊は、十代の少女の日常にどう作用したのか。同時代の少年文学に描かれた家族、あるいは少年と（旅する）おじさんの関係[1] に対応するような、少女に固有の家族関係は存在するのか。とりわけ同性の母と娘あるいはおばと姪の関係に注目しながら、両大戦間期ドイツ児童文学に描かれた少女像の一側面を明らかにしたい。

1　考察の対象とする 5 作品のあらすじ

1940 年代以降、ドイツ本国においてすら再版されず、[2] また邦訳もないため、現在ほとんど知られていない 5 つの作品のあらすじを簡単に紹介する。なお、順番は表題主人公の年齢の低いものからとした。

1-1　エルフケン『ニッケルマンのベルリン生活』(1930)

出版当時、すでに教育学者として名をはせていたタミ・エルフケン Tami Oelfken（1888-1957）が、初めて子ども向けに書いた小説『ニッケルマンのベルリン体験』*Nickelmann erlebt Berlin* では、ベルリンに暮らす 10 歳の少女ニッケルマンの日常が物語られる。ある日、彼女の住むアパートの前で映画撮影が行われ、見物中のニッケルマンも急きょ出演させてもらえることになる。親友とふたりで出かけたデパートでは、万引き犯を目撃して衝撃を受ける。最後は子ども仮装パーティに参加し、ニッケルマンの親友が大賞

を獲得したところで幕を閉じる。

1-2　ベルゲス『リゼロット、平和条約を締結する』(1932)

ラジオ番組の制作に携わるジャーナリスト、グレーテ・ベルゲス Grete Berges(1895-1957)の『リゼロット、平和条約を締結する』*Liselott diktiert den Frieden* は、ハンブルクに暮らす 11 歳の少女リゼロットの秋からクリスマスまでを描いた物語である。少年グループを結成した男子たちが、女子に対し荒っぽく振る舞うことに義憤を覚えたリゼロットは、25 名の女子を束ねてグループを結成し、自らリーダーに名乗り出る。男女それぞれのグループの存亡をかけた決戦は、リゼロットの作戦が功を奏して女子グループが勝利する。そして彼女主導で男女間の平和条約が締結される。この様子が地元の新聞に掲載され、さらにラジオ放送や映画化・書籍化までされることで、リゼロットの勇気は世界中に知れ渡ることになる。

1-3　アルンハイム『ルッシュの成長』(1932)

生没年など不詳なロッテ・アルンハイム Lotte Arnheim『ルッシュの成長』*Lusch wird eine Persönlichkeit* の主人公ルッシュは、ベルリンの女子ギムナジウムの 2 年生（11-12 歳）である。出張先で父が骨折したため、母も父を迎えに出かけ、しばらく家を空けることになる。その間、ルッシュは妹の世話などの家事をひとりでこなす。帰宅した父は自宅療養せざるを得ず、母は収入の減少を心配する。ルッシュは両親に内緒で質屋に行ったり、家庭教師のアルバイトを探す。そうやって稼いだ金で家族にクリスマスプレゼントを用意し、ルッシュはみなに喜ばれて満足する。

1-4　ヒンツェルマン『ベルベルが街にやって来た』(1932)

ライプツィヒに生まれ、スイスで亡くなったこと以外、生い立ちについてほとんど知られていないエルゼ・ヒンツェルマン Else Hinzelmann（1895-1969）の『ベルベルが街にやって来た』*Bärbel kommt in die Stadt* は、ハルツ山麓の農場で暮らす 15 歳の少女ベルベルが、子どものいないおばに連れられ、ベルリンにやって来るところから始まる。大学教授のおじ、その母らと暮らす中、それまで田舎で野生児のように育てられた少女は、徐々に都会の生活に馴染んでいく。クリスマスに帰省し、郷里で 16 歳の誕生日を迎えたベルベルは、再会した幼馴染みの少年には距離を感じる一方、おじの教え子で大学講師の青年に惹かれるようになる。その後、彼女はふたたびベルリンに戻り、カメラマンを目指して女子専門学校に通う。さらにベルリン大学に職を得た青年と婚約する。

1-5　ホーラート『ハネローレ、大都会で暮らす』(1932)

クララ・ホーラート Clara Hohrath（1873/78-1962）の『ハネローレ、大都会で暮らす』

Hannelore erlebt die Großstadt もまた、地方出身の少女の視点から都会の風俗を描いた小説である。シュトゥットガルトの音楽学校に通う 17 歳のハネローレは、親戚夫妻のもとに下宿している。初めて体験する大都市での生活や、田舎にはいないタイプの同世代との出会いについて、ハネローレは両親や双子の妹に宛てて手紙で報告する。やがてハネローレは文明よりも自然を愛する、はとこの青年（下宿先の親戚の次男）に惹かれて婚約する。そして彼が目指す雑誌の発刊に協力することを誓う。

2　父の不在あるいは不可視化

これら 5 作品に共通する主人公の家族関係でまず目を引くのは、父親の存在感のなさである。最年少の少女、ニッケルマンは写真でしか父親を知らない。

> （前略）ニッケルマンは父親を知らない。彼女が生まれるずいぶん前にもう亡くなっていた。母の手元にはたくさんの写真が残っていたので、ふたりとも父の外見には親しんでいた。[3]

ハルツ山麓の農場に暮らすベルベルも 2 歳の時に父を亡くしている。ふたりの父の死因はともに第一次世界大戦での戦死である。

ハンブルクで祖父母および母親と暮らすリゼロットにも父親はいない。それが死別なのか離婚なのかは判然としないが、作中、彼女の父親はまったく話題にされない。

ルッシュの父は物語の冒頭で足を骨折し、自宅で療養している。にもかかわらず、父が娘と積極的に関わる場面は存在しない。

> （前略）パパは最近、不機嫌なことが多い。前はあんなによく気が利いたのに。こっちがせっかく親切にしてあげても、急に怒り出したりする。足が悪いから神経質になってるんだろうな。[4]

> ルッシュが家に帰ると、なんだか重たい空気が漂っていた。ママはぜんぜん喋らないし、パパは机に向かっていて頭も上げない。（119）

ハネローレの父は田舎の牧師として健在だが、親元を離れ、都会で成長していく主人公の手紙および日記から成る小説には、手紙の受取人として登場するだけである。

戦死によって文字通り父がいなくなる他にも、障害を負って復員したり、戦後の不景気で失業するなどして、父親の影が薄くなる傾向は、同時代の少年文学にも見られた。その際、少年文学では父に代わっておじが活躍し始めた。少女文学においておじはどういった

存在として登場するのか。次章では、父とは異なり 5 作いずれにも登場する少女のおじについて検討する。

3　おじさんの存在感

不在の父とは対照的に、5 つの少女文学すべてに「おじさん」Onkel と名の付く人物が登場する。少年文学同様、少女文学においても、父とは逆相関の関係で存在感を発揮するのがおじなのである。

ニッケルマンのハンスおじさんは、大通りを隔てた向かいに住んでいる。幼い頃のニッケルマンは、ベランダ越しにおじとジェスチャーゲームをして遊んだという。しかし彼女が学校に上がり朝が早くなると、おじと縁遠くなる。なぜなら「寝ているのが一番健康にいい」と公言するおじの職業は作家で、ニッケルマンの通学時にはまだ寝ているからである。

> （前略）通りで見かけるおじさんはふつうの男の人みたいだった。タバコの匂いがして、手袋のままニッケルマンのあごを触ってきた。ニッケルマンはそうされるのが嫌だった。もしもおじさんがフレ（引用者中：犬の名前）の飼い主じゃなかったら、とっくに忘れられていただろう。(20)

ニッケルマンが近年、ハンスおじさん以上に懇意にしているおじさん、あるいは父親代わりの成人男性は、アパートの管理人のミートケさんである。ある日、ニッケルマンの親友でユダヤ系のマリアンネが、クラスメイトから「イエスさまを磔にしたのはユダヤ人」「ユダヤはドイツから出て行け」と罵られる。するとふたりはミートケさんを訪れ、「本当にユダヤ人がイエスさまを殺したの？」と質問する。それに対しミートケさんは以下のように答える。

> ミートケさんはタンスの上に目を向けた。そこには軍服にエーデルワイスを挿したミートケさんの写真が飾ってあった。
>
> 「ずいぶんと昔のことだから、誰ももうそんなこと知らないんじゃないか。だけどキリスト教徒が殺し合ったのはそれほど昔のことじゃない。4 年もの間ずっとな。命令されたからやったけど、何のためにそんなことをしているのか、誰もわかっちゃいなかった。人殺しなんて世界中にいるもんだ。私もそのひとりだ」
>
> びっくりしてニッケルマンとマリアンネは目を合わせた。
>
> 「お前の父さんもそうやって殺されたロだよ。イギリスで長い間、捕虜になって病気にもなって、出られた時にはもう死んだに等しかった。いい奴だったよ。このアパ

ートの階段を昇る姿をいまでも思い出すんだ。お前はまだいなかったから、覚えてないだろうけどな」

　するとミートケさんの奥さんが来て、子どもに政治談議なんてやめてよ、と言った。あんたの仲間と違って、アパートにはそれで気を悪くする人だっているかもしれないんだから。だけどふたりはミートケさんの考えを聞けて大満足だった。ミートケさんは間違ってないと確信した。（59-60）

夫人と違って 10 歳児を子ども扱いしないミートケさんにニッケルマンは懐く。この章のタイトルが「ミートケさんちで哲学する」Bei Mietkes wird filosofiert であるように、少女は父代わりのおじさんを通じて、未知の世界を垣間見、考えを巡らせるのである。

　ニッケルマン同様、ひとりっ子のリゼロットには、マックスおじさんがいる。同居はしていないが休日の昼食時などに頻繁にやって来ることから、彼も近くに住んでいると考えられる。リゼロットが女子グループの結成を思いつき、規約を起草していると、おじは「飯が冷めるぞ」と邪魔をする。

　マックスおじさんは何にそんなに夢中になってるんだ、とリゼロットをからかった。だけどおじさんが本気で怒っていないことはわかっていた。リゼロットはおじさんに言われるままにしておいた。おじさんは本当に賢くていい人だから。[5]

　リゼロットは部屋のなかを大またで歩きながら、女子グループの結団式で披露するスピーチの練習をする。なぜなら「おじさんも講演の準備をする時はいつも、あちこち歩きながらやっているのを見たことがあったから」（51）。彼女の平和のためのスピーチの決め台詞「だってみんな人間でいたいもの」denn wir wollen Menschen sein の出典がマックスおじさんであることも明かされている。

　ベルベルが農場からベルリンにやって来ると、彼女のおじはバラの花束を手に駅で出迎えてくれる。おじの職業はベルリン大学ドイツ文学科教授。そんな彼をベルベルは「おじさん」でなく「プロフェッサー」と呼ぶ。タイピングを覚えたベルベルは、おじの手書き原稿のタイプを引き受け、秘書のような存在になる。おじは姪っ子に田舎では触れることのなかった美術やドイツ文学の世界を教えてくれる。やがてベルベルはおじのかつての教え子で、同じくドイツ文学を講じる若手研究者と婚約する。ここでも「プロフェッサー」は姪にとって父親代わりの役割を果たしていると言えるだろう。そんなおじと姪の関係、両者の相互作用について、おばは次のように評している。

「（前略）あの人がベルベルをまじめに仕向けたのか、それともベルベルがあの人に笑うことを教えたのか、それははっきりしないわね」[6]

父が健在なハネローレにとっても、郷里を離れた現状では下宿先のおじさんが父親代わりを務めている。ただしこのおじは戯画化されて描かれており、彼の愛情は必ずしも姪には届かない。年金生活者で時間に余裕のあるおじは、毎朝水泳パンツ姿でベランダで体操したあと、森までジョギングをする。裸で体操するおじ（の後ろ姿）を初めて目にしたハネローレは、当然のことながら彼を不審者と見まがう。おじはハネローレを伴い郊外の宮殿まで「競技ランナーのように」走って出かける。おかげでふたりは通常 2 時間から 2 時間半かかるところを 1 時間半で着いてしまう。おじいわく、「血の巡りがよくなって、これが身体にいいんだ」。[7] 他におじがハネローレを連れて行く場所はプールであったり、自然療法医の講演会であったり、自身の偏った主張に則ったところばかりである。健康オタクのおじは、心理的抑制がはたらいて学校で思うように歌えないハネローレに対し、運動と食事療法を唱える健康冊子を手渡す。しかしハネローレがそれを参考にすることはない。

5 作中、唯一父と暮らしているルッシュにとっておじさんは、父と並び称される存在である。

> ルッシュがこれまでの人生でよく知っていて尊敬できる男の人はふたりだけ、それはパパとオットーおじさんだ。おじさんに関して言うと、おじさんはとてもいい笑顔をしていて、いつもご機嫌だし、子どもの考えていることがわかるという、すごい才能の持ち主だった。（中略）要するにおじさんは、あんなに人生を楽しんでいる人はいないんじゃないかと思わせる人だった。
>
> パパはぜんぜん違っていた。パパはもっとずっとちゃんとしている。
>
> 小さい頃、ルッシュはため息をつきながら「パパはもう独身じゃないから、私は誰とも結婚しない」なんて言ったことがあった。
>
> パパはとにかく力持ち。簡単にママを片腕で持ち上げて、もう片方にはルッシュと妹のシュパッツをまとめて抱いて、口笛を吹きながら部屋を歩き回ったりもできる。それでもぜんぜん疲れたそぶりを見せない。（31-32）

そんなにたくましい父も、本作に登場して早々に骨折し、無力な存在と化している。その結果、父に代わって、あるいは父の分まで、おじが存在感を発揮することになる。第 13 章「オットーおじさん」Onkel Otto では、「絶対にタネを教えてくれないし、絶対に失敗しない」おじの手品に熱狂する姪たちの様子が描かれる。ルッシュにとっておじは「尊敬できるだけでなく、半分神さまみたいなもの」であり、学校の成績表にならって点数を付けるとすると、最高点の 1 より上を行く「1 プラス」とまで言い切る。

クリスマスが近づくとオットーおじさんは、バスローブにサンダル、シルクハットという「超モダンな」な従者ループレヒト[8] に扮して登場する。そしてルッシュに警官の首振

り人形をプレゼントする。最近、警察に補導されたばかりのルッシュは、このプレゼントにぐうの音も出ない。昔ながらのループレヒトは悪事を働いた子どもを鞭打つことで反省を促したが、オットーおじさんはそれとはまったく別の方法で姪への教育的効果を狙ったものと考えられる。

以上のように、父に代わって、あるいは父よりも近しく少女たちと交流し、彼女らの成長を見守るおじの存在は、どの作品にも見て取ることができる。その際、おじの定義は古典的なそれ、すなわち母の兄弟に限定されることはなく、[9] もっと広義に、近所のおじさんにまで拡大されて解釈されている。しかし少女文学におけるおじさんは、少年文学におけるおじさんほど、主人公の将来に決定的な影響を与えていないように思われる。そもそも少女文学のおじさんは旅をしない。出征を旅の変種と見なしたところで、その経験を少女に還元することはできまい。したがっておじさんが少女に提示できる異世界や未来像は、そう多くはないのである。不在の、あるいは影の薄い父親に代わり、おじが姪を楽しませたり、半ば友達感覚で付き合える大人として寄り添うことはあっても、少女の成長に指針を与えることは（でき）ないのではないか。そこにはやはり性差、男女の性役割の違いが影響していると考えて差し支えないだろう。少女文学における親子関係を考える上でより重要なのは、男親（やその亜種であるおじ）ではなく、むしろ同性の母親かもしれない。次章では少女文学に描かれた母と娘の関係に論を進めたい。

4　母と娘のアンビバレントな関係

父親のいないベルリンのニッケルマンとハンブルクのリゼロットの母親は、ひとり娘を養うため、どちらも忙しく働いている。幼い娘らはそのことを理解しながらも、母が家にいてくれることを何よりも望んでいる。

> クリスマスイブの日、ニッケルマンはとにかくうれしかった。お母さんが四日間の休暇を取れたからだ。四日の間にふたりで何をしようか、全部を考え出すのはたいへんだった。いっしょにゆっくり朝ごはんを食べて、散歩して、向かい合ってクリスマスの本を読んでもらえたら、どんなに素敵なことだろう。(65)

> （前略）母ちゃんが私の計画（引用者注：女子グループの結成）を知ってもきっと怒らないはず、リゼロットはそう確信していた。母ちゃんが稼ぎに行かずにいつも家にいてくれたら、何でも打ち明けられるんだけどな。マックスおじさんも私のことをわかってくれる。だから何でも話せる。おじいちゃんとおばあちゃんも大丈夫。だけど絶対に必要なのは母ちゃんひとりだけ。母ちゃんが暇な時は何だってずっと話していられる。(54)

ニッケルマンは母親をファーストネームで呼ぶ。リゼロットも「お母さん」Mutter ではなく「母ちゃん」くらいの愛称形の Mutti と呼ぶ。ふたりより年上のベルベルも片親の母を愛称形の Mutsch と呼んでいる（以下、本論では Mutsch を「おっ母」と訳する）。ベルベルいわく、「お母さん（Mutter）なんて味気ない呼び方は嫌い」（12）。こういったところにも、父なき家庭の母と（ひとり）娘の距離の近さ、権威でなく友愛に基づいた両者の関係が表れている。[10]

都会で勤めに出るニッケルマンやリゼロットの母とは異なり、ベルベルの母は亡夫から引き継いだ大農場を経営している。自然に囲まれた暮らしゆえ、乗馬やスキーが得意な母は、帰省した娘とスキーを楽しんだあと、娘から意中の人の存在を告白される。

> 「おっ母、彼っていい人でしょう」
>
> ベルベルはお気に入りの体勢で母の枕元に座った。母はまだ横になっていた。パジャマ姿のままやって来たベルベルは、ベッドの足元に体育座りをした。いつもこの状態で母に思いの丈を打ち明けたり、母からベルベルの知らないことを教えてもらったりしたものだった。そんな時、母と娘は心からの対話を楽しんだ。（92）

父のいない娘にとって、片親の母の影は決して薄くはない。多忙や別居が原因で、母親との物理的心理的距離が大きくなればなるほど、娘が思慕を募らせている事実から、両者の親密な関係性を読み取ることはそう難しくない。それは親の威厳を盾にした、旧来の親子関係とはまったく異なるものである。

この傾向はもうふたりの少女、ルッシュとハネローレの母との関係にも共通している。ルッシュは母を英語風に「ママ」Mum と呼ぶ。父が旅先で怪我したことに動揺するママに代わり、娘は率先して荷作りを行う。

> 「クリームでしょ、室内履きでしょ、便せんでしょ」ルッシュは数え上げ始めた。
>
> 「万年筆は入れた？　タオルも要るわね。お風呂セット、歯ブラシ、部屋着。これは旅先で読むロッテ・アルンハイムの本。予備の薄着と厚着も入れておくわ、道中、何があるかわからないから」
>
> 「もうじゅうぶんよ」
>
> ママはこれほどの細かい気配りは自分にはできないと思った。（33-34）

両親が帰宅したのちも、母の様子がおかしいと察知したルッシュは、それとなく母とふたりだけで話す機会を窺い、相談に乗ろうとする。

「今度ばかりはあなたにもどうしようもできないわ」
ママは廊下で手短にそう言った。
「私があなたくらいの歳の頃には、そんなことぜんぜん考えたこともなかった。困ったことにお金の心配なの」
ルッシュは黙って聞いていた。いま自分が何か言ったら、ママはこの話をすぐにやめてしまうとわかっているかのようだった。ルッシュはすべてを聞きたかった。子どもにはここまで、なんて配慮は必要なかった。(62-63)

こうして母から家計の窮状を打ち明けられたルッシュは、ひとりで質屋に駆け込む。あるいは買い物に行く持ち合わせがないと嘆く母に対し、商店で付けにしてもらうことを提案する。

「(前略) いままで付けにしてもらったことなんてないんだから、一度くらい大丈夫だよ。(中略) ママが嫌なら私が買い物に行ってあげる。お金持ってくるの忘れましたくらい言えるよ」(120)

ルッシュは母の弱さや頼りなさを認めた上で、それを軽蔑することもなければ非難することもない。むしろ母の幼さあるいは若さを楽しんでいるかのようである。

「(前略) ママと出かける時はいつも姉妹みたいに振る舞ってあげるの」(18)

その一方で、彼女は母を冷静に分析する視点も併せ持っている。すでに述べた通り、ルッシュは作中、いたずらの度が過ぎて警察に補導される。その際、別の女生徒はすぐに母親が引き取りに来てくれたが、ルッシュの場合、そうはいかなかった。

「君のほうはお父さんが電話に出られてね。いい加減、自分の始末は自分で付けろとおっしゃっていたよ。誰も引き取りに来てくれないとなると、明日の朝までここにいてもらうしかないか」
ルッシュは歯を食いしばった。ママなら喜んでここから救ってくれるのに。だけどママはパパに反対されたなら何もできない。そのこともルッシュにはわかっていた。(97)

ルッシュの母親はワイマール共和国期を象徴する自立した「新しい女」とは対照的な人物、家長である夫に恭順な古い世代を象徴する女性と見なして間違いない。そんな母親にルッシュは変化を求めない。むしろ理解すら示しながら、自らは母親とは違う道を歩む意

思を隠そうとしない。彼女の日記には以下のような記述がある。

「ママを見ていると時々とても心配になる。いつも元気に振る舞っているけど、弱いところがありすぎるから。ママには助けてくれる人、ママの悩みを全部引き受けてくれる人が必要なんだ。私はまだ学校に行かなきゃいけないけど、卒業したらめちゃめちゃ儲かる仕事を考え出したい。そしたらママにはお手伝いさんを付けてあげよう。たまにはお芝居にも行かせてあげなきゃ。もちろんいつも桟敷席で、毎回新しいドレスに身を包んで」(48)

自らは「新しい女」になることを自覚しながら、古い世代への共感を忘れないのは、ハネローレもまた同様である。ハネローレは母が「若い世代の人間でもなければ、新しい考えの持ち主ではない」(72) と認めた上で、それにもかかわらず、シュトゥットガルトでできた最初の友人、シルクのパジャマを着用し、タバコを吸ったり、ロシア人（厳密に言うとソ連人）の彼氏のいる、田舎にはいないタイプの女友達と母を引き合わせようとする。

ハネローレの母はかつてピアノ教師だった。その点で娘の音楽の才能は母親譲りと考えられる。とはいえ、同じ音楽の世界を志しながらも、娘が母より高度な教育を受け、母の知らない世界へ羽ばたきつつあることは、母に宛てた以下の手紙の一節から窺い知ることができる。

「(前略) ピアノの先生だったお母さんでも声楽の勉強のことはわからないと思うわ。イタリア語の授業もあるし、リトミックや発声、理論、ソルフェージュもあって、いろんな先生が教えてくれるの」(23)

母のことは好きだけれど、母との違いに自覚的な十代の娘たちが今後、母の生き方を再生産するとは考えにくい。[11] そのことは小説の最後に婚約する、つまり新しい家庭を築こうとする年長のベルベルとハネローレがすでに実践している。その際、ふたりが目下、母とではなくおばと同居している事実を見逃してはいけない。さらには十代前半のニッケルマン、リゼロット、ルッシュの周囲にも、母とは異なる成人女性、おばさん的人物が登場する。次章では少女文学に現れるおばさんの存在意義について、少年文学におけるおじさんとの比較を交えながら考察する。

5　おばさん文学の（不）可能性

ニッケルマンにとってもっとも身近なおばさんは、同居するズーザおばさんである。語り手が彼女は母といっしょにデンマークの学校に通っていたと述べていることから、この

おばは母の姉妹と考えられるが、作中、彼女の影はたいへんに薄い。学校に上がり、だんだんと行動範囲を広げていくニッケルマンを、ズーザは必要以上に心配する。

> それからニッケルマンの「裏通り探検時代」が始まった。おばさんはそれを「うろつき回る」と言って許してくれなかった。ベランダから通りの隅々までは見渡せないからだ。だけどお母さんは、子どもは年を追うごとに自分の世界を広げていくものと思っていた。(14)

ニッケルマンにとって「おば」Tante と名の付くもうひとりの人物、ケーテおばさんは、作中言及されるが登場はしない。アパートの管理人のミートケさんの妻も、夫ほどニッケルマンとの交流はない。担任のフランケ先生に至っては、きわめて辛辣に評されている。

> (前略)クラスでニッケルマンほど先生のことが好きじゃない生徒はいなかった。ニッケルマンには他の誰とも比べものにならないくらい、すてきなお母さんがいたからだ。たしかに忙しいお母さんとはゆっくり会えないけれど、仮に先生とお母さんを比べてみたところで、フランケ先生のほうがずっと頭が悪くて器が小さいのはわかりきっていた。それに先生はしゃべりすぎる。(中略)怒らないから先生の悪いところを教えてちょうだい、なんて言うから「先生はしゃべりすぎです」とはっきり言ってやった日から、ニッケルマンは先生のお気に入りじゃなくなった。(44-45)

ズーザおばさん然り、フランケ先生然り、ニッケルマンの母と同年配の成人女性は、あたかも母と比較され、母の優位を強調するために登場しているかのようである。この構図が娘の視点から繰り返されるさまをここでは確認しておきたい。

ニッケルマンのズーザおばさん同様、忙しい母に代わりリゼロットの世話をしてくれるのは、同居する祖母である。しかし彼女と孫娘の距離はつねに存在する。リゼロットの活躍で男女の子どもの対立が解消され、そのことが新聞に掲載されると知った祖母の反応は、おじや母と異なり芳しくない。

> (前略)「おお、有名人になったな、リゼロット。新聞に載ってるぞ」
> マックスおじさんにそう言われるとリゼロットは顔を赤らめ、母ちゃんの様子を窺った。母ちゃんはやさしくうなずいた。だけどおばあちゃんは、嫌だよ、という様子で黙って首を横に振った。(89)

リゼロットが女子グループの結成という一大事に関し、留守がちで相談に乗ってもらえない母や無理解な祖母に代わって頼りにするのは、彼女が「赤ちゃんの頃から面倒を見て

くれている」家政婦のクリストファースさんである。結団式には呼び鈴が欠かせないと考えたリゼロットは、その調達をクリストファースさんに依頼する。

（前略）食器棚の奥深くまで探し回り、台所の端々に手を伸ばし、いくつもの引き出しをひっくり返すクリストファースさんの動きを、リゼロットはドキドキしながら見守った。そしてクリストファーさんのがっちりした手の中に、古びて錆びついた呼び鈴があることにはっと気づいた。机に置いてみたら問題なく音が出た。リゼロットはうれしさのあまり片足ずつジャンプした。クリストファースさんはすぐに窓辺に行って庭を見やったけど、祖母には気づかれていなかった。（50）

作中、この場面にしか登場しないクリストファースさんは、祖母と同じく台所を持ち場とする女性である。たしかに彼女は「リゼロットを自分の子どものように思っている」が、だからといって彼女をリゼロットの母と同列に並べるのは無理がある。クリストファースさんは、家事を取り仕切る祖母との比較において、祖母よりもリゼロットに近しい人物として登場しているに過ぎない。したがって彼女がどれだけリゼロットに慕われようとも、そのことで母の地位が脅かされることはないのである。

専業主婦の母を持つルッシュには、母代わりのおばは存在しない。しかし彼女の周囲にも、母親以外の成人女性がたびたび姿を現す。第 16 章「ルッシュ、とても風変わりな婦人と知り合う」Lusch lernt eine sehr eigenartige Dame kennen に登場する婦人は、ルッシュが家庭教師の面接に訪れた先の奥様である。午後なのにガウンを羽織り、くわえタバコで現れた彼女の応接間のブロンズ像や大理石像について、ルッシュは否定的な評価を下す。

（前略）実用的じゃないものはせめて感じくらいよくないと、存在する理由なんてないわ。（71）

母とはあまりに対照的なこの婦人とルッシュの面会は、母娘関係から派生して生じた母とは異なる成人女性と少女の関係を考える上で興味深いものがある。

「インゲの勉強を見てくれるんだったわね」

慌ててやって来た婦人は息を切らしながらそう言った。

「それにしてもあなた、まだまだ子どもでぜんぜんしっかりしてそうには見えないわね。うちの娘は 8 歳。忙しくてあの子にかまってる暇なんてないから、かなり荒れてるわよ。仕事があるから私はほとんど家にいない。その結果どうなるか、私にはわからないわ。いまの時代、私じゃなくったって誰にもわからないでしょうけど。嫌になるわよ、何もかもが。から元気でも出してやっていかなきゃ、すぐにすってんてん

になってしまうからね、この時代」

ルッシュは黙って聞いていた。「すっきり全部話させよう」　博愛精神でそう考えていた。感情をぶちまけることで、婦人の気分はよくなったみたいだった。前々からそうなのだが、ルッシュにはおかしな人を見つけるのが何よりも楽しかった。(73)

ルッシュは担任の女性教師にも手厳しい。オットーおじさんにしたのと同様、女教師にも点数を付けるとすると、最低点（5 点）とは言わないまでも、3 点ないし 4 点という。

これら 3 作品に登場する母とは異なる成人女性、おばさん的人物を見る限り、彼女らが母よりも魅力的に映ることはあり得ないように思われる。ひとつ屋根の下で暮らす母娘の関係が強固な状態にある限り、母とは異なる成人女性は母を引き立てる脇役でしかないのかもしれない。

しかし少女がだんだんと歳を重ね、母と別居し、母の知らない自分の世界を持ち始めると、母代わりのおばと少女の関係が密になる傾向が見て取れる。以下、年長のふたりの少女、小説の最後に婚約するベルベルおよびハネローレとおばとの関係を見てみよう。

ベルベルのおばは母より 6 歳年下で、夫同様ベルリンで教職に就いている。母よりも大柄だが、母が妹を「おチビちゃん」と呼ぶのに習い、ベルベルも彼女を「小さいおばさん」と呼ぶ。子のいないおばは姪を里子として預かり、ベルリンで育て直すことを姉に提案する。それまで田舎で自由に、あるいは甘やかされて育ったベルベルを、新しい環境下で生まれ変わらせようとするのである。

ベルリンでおばは、姪をカフェやデパートに連れ出すほか、信号の渡り方や二階建てバスの乗降の仕方を教える。夫とふたりでベルベルを映画館や劇場に連れて行く。それまで話し言葉だけの世界に生きていた姪に、正書法通り綴ることを指導する。そうやって啓蒙されたベルベルが、おじのドイツ文学の講義を聞きたいと言い出すと、おばは姪を大学に案内する。ベルベルは都会で暮らすおばの姿を通じて、母とは異なる「新しい女」の生き方を知ることになる。彼女が母に宛てた最初の手紙には以下のように記されている。

（前略）イレーネ（引用者注：おばの名）は「教授夫人」と呼ばれるのを嫌がるの。いまは女の人も自分で肩書きを手に入れられるんだから、パートナーの称号で呼ばれたくないんだって。(中略) これって間違ってないよね？　イレーネは本当に賢いと思うわ。おっ母の妹だもん。だけどおっ母のほうがずっとずっとかわいいよ。(32)

イレーネとベルベルの共同生活が進行すると、おばと姪の距離は一層近づいていく。

（前略）ここベルリンではたくさんの女の人が働いていることをベルベルは知った。男女が並び立ち、お互いに日々の生活に協力し合うのがどんなにいいことか、おばに

すっかり教えられた。(112)

その一方で姪がおばの生き方をそのままなぞろうとしていないことは、引き続き発せられる以下のひと言から垣間見えよう。

「だけどね」ベルベルは無邪気に付け加えた。
「子どもがたくさんできたら私は家にいるつもり。自分の子どもの写真だけを撮りたいの」(112)

ところでベルベルにとってベルリンで母代わりとなる人物は、イレーネだけではない。彼女らと同居するイレーネの義母、「プロフェッサー」の母もまた、ベルベルと親密な関係を築いていく。初対面の時からベルベルに自らを Mühmchen「おばちゃん」[12] と呼ぶよう指示するこの人物は、ベルベルにとって祖母くらいの年齢の老婆と考えられる。しかし都会で生まれ変わりつつあるベルベルに対し、おばちゃんは折に触れて貴重な、適切な助言を与える。ベルベルが初めて帰省した折、4 ヶ月前までは当たり前だった田舎の暮らしに違和感を覚え戸惑っていると、彼女は「本当の孫のように」ベルベルを抱きしめてこう諭す。

「生きていると小さくなってて合わなくなるものもあるさ。仕方ないことだよ、ベルベル。また新しいものを見つけて、それに馴染んで、そうやって忘れるってことを知るんじゃないか。なんだっていつかは過去になるものさ。なんにもおかしなことじゃないから、自分を責めたりしちゃいけないよ」
ベルベルはおばちゃんが心の奥底まで見通していることを、まったく不思議に思わなかった。母以外にここまでベルベルの気持ちをわかってくれた人は、これまでいなかった。(84)

おばちゃんの存在によってイレーネの地位は霞む。もしもおばちゃんがいなければ、イレーネは姉に代わり、ベルベルの第二の母になり得たかもしれないが、現実にはそうはいかない。

他方、おばちゃんが母に取って代わるかというと、さすがにそれは起こらない。おばちゃんという人物は、母と娘の関係を脅かしかねないおばへの緩衝材として、おばの活躍を阻止するため(だけ)に投入されたのではないか。その結果、父に代わっておじが少年の成長の模範となったおじさん文学のように、おばが少女の理想を示すおばさん文学は成立し得ないのである。

ベルベル同様、親元を離れて都会に出たハネローレもまた、おばから都会での生活様式

を学ぶ。前述の通り、おじが行き過ぎた健康オタクであるため、ハネローレはむしろおばに懐く。おばは姪の音楽学校の入試に同行してくれる。ただし建物の中までは入ってくれない。

（前略）おばさんがいっしょに行ったっていいことなんてないんだから。いまの若い女の子は自立しなきゃ。(14)

おばは学校に馴染めず元気をなくしたハネローレを、デパートに連れて行き、流行りの洋服を着せ、「鏡で見ても自分だとわからないくらい」にヘアスタイルを変えさせる。この日のハネローレの日記を見てみよう。

（前略）私が学校でうまくいかない原因がわかった、とおばさんは言った。だいたい人は見た目で評価するから、見た目を変えちゃえばいいのよ。お前を流行りの衣装で着飾ってあげる。そしたら誰からもバカにされないわよ。(37)

おばとハネローレはおじを放置し、ふたりで映画・演劇・オペラを鑑賞する。夏の暑い盛りには市電で近くの森まで赴き、カフェで絶景とケーキを堪能する。甘いもの好きなおばに対し、おじは脳卒中の危険性を指摘するが、当然彼女は耳を貸さない。

授業でうまく歌えないハネローレを心配したおばは、「お母さんならそんなこと絶対にしないだろうけど、おじさんには内緒で」ハネローレに精神科を受診させる。この精神科医との面接がうまく行き、やがてハネローレは声楽の先生に「醜いアヒルの子の段階を克服した」と褒められる。本人いわく、それは医師のおかげだけでなく、「私を導いてくれたのはフーク、かつてイスラエルの民をあらゆる危険から遠ざけて導いたあの有名な火の柱のように、[13] フークが私の進むべき道を照らしてくれたの」(93)。

ここに忽然と現れるフークとは誰か。それはおばの自慢の息子、ハネローレにとってはとこ（Vetter im zweiten Grad）の青年である。おじとおばにはふたりの息子がおり、それぞれが帰省してハネローレと交流するが、彼女が惹かれるのはおじのお気に入りの長男ではなく、おばのお気に入りの次男だった。24 歳のフークは近隣の少年らを国内外の自然に連れ出し、合宿体験させるグループのリーダーをしている。

いつもおもしろいことを言うおばさんは、フークはルターよりも厳格な改革者なの、と言った。ルターは生きる喜びに酒と女と歌を愛したけど、フークは歌しか認めないからね。(81)

両大戦間期ドイツでは「青年運動」と称される若者の理想主義的反抗運動が広まった。

いわゆるワンダーフォーゲルはその前史あるいは初期運動に位置付けられるが、フークのグループはそれとはまったく異なるという。

> （前略）直立不動の少年たちは歌う時もわめいたりしなかった。フークは全員に注意を払い、全員がフークを尊敬のまなざしで見つめていた。（中略）彼らはだらしないワンダーフォーゲルとは大違いだった。ヒンタービーディンゲン（引用者注：ハネローレの郷里の地名）にやって来た時のワンダーフォーゲルには、女の子も混じっていたくらいだったから。（81）[14]

そんなフークにハネローレは徐々に惹かれていく。ふたりだけの山歩きや、その後の文通を通じて、文明より自然を優先する彼の生き方に感銘を受ける。そして彼の同志として生きることを決意する。

ハネローレがフークと婚約することで、彼女のおばはもはやおばではなく、もうひとりの母、義母になった。シュトゥットガルトに来て以来、ハネローレはおばから都会の娯楽について多くを学んだが、最終的にそういった享楽的な文明生活を否定するパートナーを選んだため、彼女が今後、おばの生き方をなぞるとは考えにくい。やはりここでもおばが姪の人生に決定的な影響を与えることはなく、おばさん文学の誕生はまたもや阻まれるのである。

> （前略）私はこれからはシンプルに自然を楽しもう、複雑に入り組んだり腐りかけたりしている文明を楽しむのはやめようと思った。
>
> そう誓ったあとに食べたじゃがいもは煙の味がしたけど本当に美味しかった。おばさんがこっそりリュックに忍ばせてくれたチョコレートは食べなかった。文明の味が強すぎる気がしたから。（90-91）

ここまで、少女と家族、具体的には両親およびおじ・おばとの関係について考察してきた。その結果、少年にとってのおじとは異なり、おばが少女の成長・変容に決定的な役割を果たすことはないということが確認できた。そのことは必ずしも母と娘の親密な関係を保証するわけではない。娘は仕事が忙しく、あまりかまってくれない母の愛情に飢えていることもあれば、母を自分とは異なる旧世代の女と冷静に見なすこともあった。

不在の父含め、いまある家族に満たされていない少女は、今後どういった道に進もうとするのか。少女は家族を捨ててひとり別世界に旅立ってしまうのか。次章では本論のまとめとして、少女と家族のさらなる関係、新たな関係性が構築される可能性について言及したい。

6　新しい男女関係の模索

ハネローレが婚約したフークは、人間が文明に毒される以前の、神に護られた状態の自然人（Naturmensch）を理想と見なす青年運動に従事している。ナチスの支持者なのかというハネローレの（鋭い）質問に対し、フークはこう答える。

> （前略）フークは自分はどんな党派にも属していないと答えた。一年間ラップランドで暮らし、トナカイを捕まえたり、現地の人たちと寝食を共にするなかで、ただのひとりの人間でいること、他の人のこともそうやって見ることに馴染んだらしい。属する宗教とか党派とか国籍を問うのではなく、その人自身が正しいか、立派か、信頼できるか、まずは人間性を問うてみるのだという。（110）

そんなフークの考えに共鳴したハネローレの婚約は、一般的な恋愛結婚ではなく、思想信条を共有する同志婚とでも呼ぶことができるだろう。

ベルベルとおじの教え子、若い大学講師のデーリングとの婚約もまた、新しい男女関係のあり方を予感させる。当初はデーリングに子ども扱いされていたベルベルも、大学構内で「打倒デーリング」を訴える学生グループを見つけると、身体を張って彼を守ろうとする。年の差、収入の少なさゆえ、プロポーズの言葉をためらうデーリングに対しベルベルは、「私がカメラマンになって稼ぐから」「論文の原稿は私がタイプしてあげるから」と先走って申し出る。「ベルベルといると何もしゃべらせてもらえない」と嘆くデーリングに、彼女は次のように反論する。

> 「そんなにしゃべりたければ大学で好きなだけしゃべればいいじゃない。あなたのお好きなドロステ（引用者中：デーリングが研究対象とするドイツ・ロマン派の女流作家）と結婚したら、奥様はずっと黙っていてくれたのにね」
>
> 「ドロステはもうとっくに死んでるよ。僕は生まれるのが遅すぎたんだ。こうなったら田舎者で男勝りな君で我慢するか」（130）

結婚したら執筆に励むという未来の夫にベルベルは、いまから「妻バルバラへ」との献辞を要求する。婚約時からすでにかかあ天下を予感させるベルベルとデーリングの関係は、同様に大学教員の夫を持ちながら、事あるごとに夫の機嫌を伺いがちなイレーネと「プロフェッサー」の関係とは大きく異なるのである。

婚約するにはまだ若すぎるもう 3 人の少女たちの言動からも、新しい男女関係を模索する姿を読み取ることができる。突然の母の出立にさびしがる妹に対し、ルッシュは「結婚」という語を用いて奇妙な説得を試みる。

（前略）「パパが急にママに会いたくなったっていうんだから、行ってあげなきゃ仕方ないでしょう。結婚するとそんなもんよ」（中略）

「あんただって将来、結婚相手にいますぐ会いたいって言われたらすぐに飛んで行くわよ」（35）

両親の留守中、母から家事を任されたルッシュは、妹を以下のように誘導して皿洗いを手伝わせる。ここでもキーワードは「結婚」である。

「皿洗い」さしあたりこいつがルッシュの難問だった。

「シュパッツもおとなしく手伝ってくれるわ」ママは無邪気なそんなことを言っていたけど、（中略）何か別の手を打たなきゃ。

「まずはそのドレスを脱ごうか」

ルッシュはシュパッツに巧みに言って聞かせた。

「その代わりパパの帽子をかぶってごらん。私と幸せな夫婦ごっこをやろう。シュパッツは旦那さん役をお願い。幸せなカップルなんだけど、お金がないから自分たちで家事を全部やらなきゃいけないんだ。本当はすごく能力があるんだけど、まだあまり仕事がなくって、だからこれからどんどん頑張る男の人がシュパッツね。すごく性格がよくって、アメリカにいる新しいタイプっていうのかな、奥さんの仕事なら皿洗いだって何だって手伝ってくれるんだ」

この設定にはシュパッツも逆らえなかった。パパのくたびれた帽子と琥珀のパイプに身を包むと、喜んで皿洗いを始めた。（41-42）

骨折してふさぎがちなパパと何もかも娘に頼りがちなママを尻目に、ルッシュは両親とは違う男女（夫婦）関係を夢見ていることが伺える。以前は「パパ以外の誰とも結婚しない」と口にしていたルッシュのいまの理想の男性は「アメリカにいる新しいタイプ」、女性と家事を共有するパートナーであるように思われる。

男子だけのグループに対抗し、女子だけのグループを率いるリゼロットも男嫌いなわけではない。とりわけ少年グループのリーダー、ペーターとの関係は注目に値する。ペーターは当初からリゼロットを評価していた。

（前略）グループのリーダーたるもの、女にかかずらってはいられない。父さんならきっとそんなことしないはずだ。だけどリゼロットは違うんだ。そのことは誰もが認めるだろう。あいつはいつもがむしゃらで、こっちがちょっと強く出たところで、他の女みたいに絶対に泣いたりしない。（24）

その後、グループの抗争が原因でペーターとリゼロットは仲違いする。するとペーターは「僕たちの友情を終わりにしたくない」と詫び状をしたためるが、リゼロットは「とても上機嫌でその手紙を枕の下に押し込んで」眠りにつく。ペーターからグループの存亡をかけた決闘を申し込まれた際も、リゼロットはすぐには彼の手を握り返そうとせず、「ひとつだけ条件があるんだけど」とタフ・ネゴシエーターぶりを発揮する。はたしてその戦いが少女グループの勝利に終わると、ふたりの関係は完全にリゼロット主導で展開されることになる。

> （前略）リゼロットは通りを横切ってペーターのところに行き、片手を差し出した。満面の笑みを浮かべた彼女には、男子と敵対する気などまったくなかった。ペーターはためらいがちに手を握り返した。リゼロットはうれしそうに「また友達同士だからね、ペーター。明日の午後、いつものハイン通りとヘーゲ通りの角で会おうよ。平和条約を結ぶから」（83）

ここでも男女が同等に意見を述べ合える関係、場合によっては女が主導権を握る関係の芽生えを見て取ることができよう。

本論で扱った最年少の少女、10 歳のニッケルマンの男関係を探るのは難しい。親友マリアンネの兄弟シュテファンから『トム・ソーヤ』を借りているが、それ以上の展開は見られない。そんな中、小説の終盤に急きょ、ニッケルマンの住むアパートに 14 歳の少年が転がり込む事件は目を引く。

カリ・ムルクスと名乗るこの少年とニッケルマンの共通点は少ない。強いて挙げれば父が従軍したことくらいか。ただし少年の父は生還している。もっとも片腕をなくしての帰還なので、戦後の苦労は言うまでもない。少年には両親も弟妹もいる。しかし父の年金と母の稼ぎでは食うに事欠き、少年は非行に走る。そして福祉施設に入れられる。施設での虐待に耐えられず脱走した少年は、ニッケルマンらの住むアパートに侵入する。そこでニッケルマンの母に保護され、彼女の尽力によってアパートの管理人のミートケ夫妻のもとに住むようになる。

博士の学位を有する母と女子ギムナジウムに通うニッケルマンにとって、これまでカリのような生い立ちの少年と出会うことはなかったはずである。にもかかわらず、敢えて小説の最後に、フルネームまで与えられて登場するこの少年はどういった役割を担っているのか。「共和国では禁止されている」児童虐待を告発するためにしてはあまりに唐突でないか。

本論で考察の対象とした少女たちが、それぞれ対等な、新しい男女関係の構築を模索していたことを考え合わせると、ニッケルマンとカリが今後どういった関係を発展させるの

か、論者には興味深い。それに関連し、カリの入居を誰よりも楽しみにしているのは意外にも管理人のミートケ夫人であるという。

> （前略）ミートケ夫人は大急ぎでえんどう豆のスープを火にかけた。カリは七時に来ることになっているが、もう六時を回っていた。あっという間に時間は過ぎて行った。何十年ぶりにミートケ夫人の鼻歌が聞こえてきた。ちゃんと歌えていなかったが、それは仕方のないことだった。夫人はこれまでめったに歌なんて歌わなかったのだから。（131）

すでに述べた通り、ニッケルマンは実のおじよりもミートケさんを父代わりとして慕っていた。その彼のもとにカリが住むことになった。すると夫人は突然、母性（Mutterwürde）に目覚めた。この変化をどう解釈すればよいのか。論者はここにミートケ夫人がカリの新しい母親になる可能性を見出した。そしてこれから先、ハネローレがおばのお気に入りの息子の思想に共鳴して婚約したように、あるいはベルベルがおじの教え子に半ば迫る形でプロポーズしたように、ニッケルマンとミートケ夫妻の「息子」カリとの間にも、新しい男女の関係が築かれるのではないかと夢想した。もっともその前にふたりが――リゼロットが少年グループのリーダーと交わしたような――男女の友情を結ぶ可能性も大いに考えられるだろう。必ずしも女性を連想させない中性的な名前のニッケルマンが、[15] カリと共同で家事（皿洗い）を行う姿も期待したくなる。ルッシュの夢見た「アメリカにいる新しいタイプ」の男に成長したかもしれない少年カリが登場する『ニッケルマンのベルリン体験』は、ナチスが政権を掌握すると発禁処分を受けた。[16] その事実を知ってなお、いや、知っているからこそ、ニッケルマンとカリの将来について、論者の想像力は刺激されるのである。[17]

7　おわりに

ワイマール共和国期末期に書かれた少年文学の主人公が、海の向こうへ旅するおじさんに憧れたのに対し、同時代の少女文学の主人公は、おじさんに憧れることもなければ、同性のおばさんを理想とすることもなかった。その代わり、彼女らは夫と対等な関係を築けなかった母の姿を目の当たりにしながら、自らはパートナーと対等な、あるいはパートナーより優位な男女関係を目指そうとした。これを少女たちの視野の狭さ、眼前の卑俗な男女関係しか見ようとしない底の浅さと片付けることはたやすいだろう。しかし論者はここに両大戦間期ドイツ児童文学の新しさ、同時代性を反映したアクチュアリティを見出すことができると考える。

一般にドイツ児童文学に家長である父の権威が弱まった家族が登場するようになったの

は、1970 年代以降と言われている。しかし父権の失墜は第一次世界大戦に敗れ、帝国の崩壊を目の当たりにしたドイツ語圏において、すでに見られた現象である。したがってその後の 1920 年代終わりから 30 年代初頭に書かれた児童文学に、この現象を反映した新しい家族が描かれていても何らおかしな話ではない。少年が父ではなくおじの背中越しに遠い世界に目を向けるようになったのが新しい流れのひとつだとすれば、少女が母やおばの姿を通じて対等な男女関係を夢見るようになったのもまた、父なき世代の子どもが選んだ新しい生き方と言えるのではないだろうか。

＜注＞

[1] 同時代の少年文学における旅するおじさんについては、拙論：「旅するおじさんの文学 —1930 年代前半のドイツ児童文学を中心に—」、『金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇』第 12 号、2020 年、17-28 頁参照。

[2] 本論執筆中の 2020 年 8 月、ベルリンおよびライプツィヒの Hentrich & Hentrich 社から『ニッケルマンのベルリン体験』が再版された。Tami Oelfken: *Nickelmann erlebt Berlin. Ein Großstadt-Roman für Kinder und deren Freunde.* Mit Fotomontagen von Fe Spemann. Herausgegeben und mit einem Nachwort von Gina Weinkauff. Berlin u. Leipzig: Hentrich & Hentrich 2020.

[3] Tami Oelfken: *Nickelmann erlebt Berlin. Ein Großstadt-Roman für Kinder und deren Freunde.* Potsdam: Müller & Kiepenheuer 1931, S. 10f. これ以降の同作品からの引用は同書に拠り、本文中に括弧でページ番号のみアラビア数字で記す。

[4] Lotte Arnheim: *Lusch wird eine Persönlichkeit. Eine lustig-nachdenkliches Mädelbuch.* Stuttgart: Gundert 1932, S. 62. これ以降の同作品からの引用は同書に拠り、本文中に括弧でページ番号のみアラビア数字で記す。

[5] Grete Berges: *Liselott diktiert den Frieden. Eine Geschichte mit heiteren Zwischenfällen. Für die Jugend von heute.* Stuttgart, Berlin, Leipzig: Union Deutsche Verlagsgesellschaft o.J. [1932], S. 39. これ以降の同作品からの引用は同書に拠り、本文中に括弧でページ番号のみアラビア数字で記す。

[6] Else Hinzelmann: *Bärbel kommt in die Stadt. Heitere Großstadt-Erlebnisse.* Stuttgart, Berlin, Leipzig: Union Deutsche Verlagsgesellschaft o.J. [1932], S. 128. これ以降の同作品からの引用は同書に拠り、本文中に括弧でページ番号のみアラビア数字で記す。

[7] C[lara] Hohrath: *Hannelore erlebt die Großstadt. Eine vorzügliche Geschichte von den heutigen Schwaben.* Stuttgart: Thienemann o.J. [1932], S. 21. これ以降の同作品からの引用は同書に拠り、本文中に括弧でページ番号のみアラビア数字で記す。

[8] 12 月 6 日に聖ニコラウスの従者として現れ、悪い子に罰を与える伝承上の存在。

[9] 古典的なおじの定義については、拙論：「おじさん文学論に向けて　―ドイツ語圏における研究史と 20 世紀初頭の児童文学を中心に―」、『金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇』第 11 号、2019 年、51-66 頁参照。

[10] ベルベルには 3 人の兄がいるが、すでにみんな家を出ており、彼女がベルリンに出るまで、実質ひとり娘として母と暮らしている。

[11] 1920 年代から 30 年代にかけてのドイツ少女文学における弱い母と自立した娘については、以下の文献を参照。Carmen Wulf: *Mädchenliteratur und weibliche Sozialisation. Erzählungen und Romane für Mädchen und junge Frauen von 1918 bis zum Ende der 50er Jahre. Eine motivgeschichtliche Untersuchung*. Frankfurt am Main [u.a.]: Lang 1996, S. 121-165. ただしヴルフは本論で考察の対象とした 5 作品を扱っていない。

[12] Tante 同様「おば」を意味する Muhme という語に、縮小語尾-chen が付いた形。

[13] 出エジプト記 13 章 21-22 節参照。

[14] 当時のワンダーフォーゲルにおける女子排除の問題については、田村栄子：『若き教養市民層とナチズム　―ドイツ青年・学生運動の思想の社会史―』名古屋大学出版会、1996 年より、とくに第 6 章参照。

[15] そもそもニッケルマンは主人公の本名ではなく、この小説が「ニッケルマンは女の子である」という但し書きのような一文から始まっている事実をここでは指摘しておきたい。なお、ハウプトマンの童話劇『沈鐘』*Die versunkene Glocke*（1896）に登場するニッケルマン（水の精）は男性である。Vgl. Birte Tost: Nesthäkchens freche Schwestern. Das ‚neue Mädchen‘ in kinderliterarischen Texten von Autorinnen der Weimarer Republik. In: Walter Fähnders u. Helga Karrenbrock (Hrsg.): Autorinnen der Weimarer Republik. Bielefeld: Aisthesis 2003, S. 239-255, hier S. 243f. und auch Birte Tost: *Moderne und Modernisierung in der Kinder- und Jugendliteratur der Weimarer Republik.* Frankfurt am Main [u.a.]: Lang 2005, S. 276.

[16] Vgl. Tost (2005): a. a. O., S. 75.

[17] 戦後、エルフケンは友人宛ての手紙の中で、この小説の続編計画について記している。Vgl. Weinkauff (2020): a. a. O., S. 118f. しかし草稿が失われているため、ニッケルマンがどういった男女関係を築き得たのかは不明である。

本研究は JSPS 科研費 18K00446 の助成を受けたものである。